

ハンガリー動乱50年:動乱を招いた暗黒時代(その2) ーノエル・H・フィールド拉致事件

盛田 常夫

1949年5月、現職の外務大臣で共産党政治局員のライク・ラーズローが逮捕され、同年10月に処刑された衝撃的な事件は、戦後の東欧社会主義形成期の象徴的な出来事として、世界史に記されることになった。当時、隣国でも同様な事件が相次ぎ、チェコスロバキアではスランスキー共産党書記長、ポーランドではゴムルカ共産党書記長が除名・逮捕され、ゴムルカは処刑を免れたが、スランスキーは処刑された。

これら一連の事件は、共産党が他政党との連立政権から共産党単独による社会主義政権樹立を目指す過程で仕組まれたもので、各国にスターリン型の独裁権力を創出しようとするソ連の意向を受けて意図的に作為されたものであった。

その発端となったライク事件はいまだ謎の部分があるとはいえ、かなりの所まで解明が進んでいる。ライクを「アメリカ帝国主義のスパイであり、ティトー修正主義に犯された敵」と証拠立てるものは何もなかった。しかし、スターリンのソ連とスターリンの忠実な生徒ラーコシは、あらゆる人的な繋がりをつなぎ合わせて、ライクを「敵」に仕立てた。そのシナリオの重要な鍵になったのが、アメリカ人ノエル・H・フィールド拉致事件である。

社会民主党の吸収

戦後直後の中・東欧の共産党勢力は微々たるものであった。しかし、反ファシズムを闘ったという倫理的な優位性とソ連軍の進駐という環境の中で共産党の影響力が拡大し、支持基盤以上の力を発揮することになった。戦後確立した議会制民主主義の中で、共産党は連立政権構築に努めたが、他方で秘密保安部隊を創設して、他党幹部の動静を探り、次第に共産党と政治的に対立する人物を粛正する方向に向かった。ÁVO、ÁVHはその実行部隊だった。

当時、この共産党の私権力とも言える政治警察の本部はアンドラーシ通り60番地にあり、ここが秘密諜報基地となっていた。隣接するチェンゲリ通りには電話盗聴設備が設置され、治安警察に所属する隊員の夫人たちが共産党に対抗する人物の電話盗聴を行っていた。この盗聴舞台はやがてハンガリー駐在外交官の盗聴へと拡大されることになった。さらに、中央郵便局にはやはりÁVOから封書開封部隊が送り込まれ、カーダール夫人だったタマーシュカ・マーリアはこの部隊で働いていた。

ÁVOの活動は当時の法律に照らしても違法であった。そのため、共産党は内務大臣ポストを確保し、これらの私的権力活動に法的な位置づけを与えることに気を配ったが、それは形式上のことだけで、内務省管轄下に入っても、この部隊は共産党の私的暴力装置という性格を変えなかった。

1948年6月、ハンガリー共産党は社会民主党を吸収してハンガリー勤労者党 (Magyar Dolgozók Párt) として再出発した。この合同において、共産党から9名、社会民主党から5名の合計14名で新党の政治局員が構成された。共産党から名を連ねたのは、トロイカの3名の他、レーヴァイ・ヨーージェフ、ナジ・イムレ、ライク・ラーズロー、カーダール・ヤーノシュ、コッシャ・イシュトヴァーン、アプロー・アンタルである。アプローはライク粛正を決定した時の政治局員であるにもかかわらず、1956年のライク復権集会でも共産党を代表して演説を行った。1988年の社会主義労働者党解党に至るまで長期にわたって権力の頂点に居座った人物である。ジュルチャーニ首相夫人の母方の祖父に当たり、FIDESZも批判しているように、アプローが共産党幹部として使用していた邸宅が、現在のジュルチャーニ首相夫妻の私邸でもある。

この社・共合同によって、ハンガリーには事実上の共産党独裁権力が樹立された。他の中・東欧諸国でも同じ社・共合同が画策され、戦後一時期続いた多数政党による連立政権が、共産党主導の独裁政治に変貌したのである。

ユーゴスラビア除名

戦後一時期の米ソ蜜月時代が終わり、二大大国は覇権の確保・拡大に努め始めることになり、戦後世界は冷戦時代に突入した。社・共合同はまさにソ連の覇権を確保するために、各国の連立政権を共産党独裁政権へ移行させる前提条件であった。

そして、さらにソ連の影響力確保のために、ソ連型社会主義とは異なる道を選択するユーゴスラビアを国際共産主義運動から破門（1948年6月）し、中東欧各国共産党に危機感を煽り、スターリン主導のソ連型社会主義の建設を押しつけたのである。スターリンと同様に、共産党内に「敵」を見つけ、それを排除する各種の「奸計」が企てられ、それぞれの国で個人崇拜的な権力構造が樹立された。

1948年9月、ソ連内務省のブダペスト代表部代理クレムニェフが、ライクに代わって内務大臣ポストを得たカーダールと面会し、ファルカシユ・ミハイの息子のヴラジミールがこの時の通訳を担当した。「ハンガリーは他の東欧諸国と違って、内部の敵や民族主義者との闘いが不十分だ」と注意を喚起するのが、この会談の目的だった。この会談の趣旨を踏まえ、ラーコシはÁVH内に特命部隊を設置した。スーチ・エルヌー率いる部隊がそれで、ピーテル・ガーボルの直接の指揮下に置かれ、共産党内部の「敵」を摘発するために特別の権限を与えられた秘密組織であった。

ここから、ÁVHはそれまでの共産党の政敵の摘発から、共産党内部の「敵」の摘発に向かった。「内部の敵」は小物であってはならない。十分にインパクトのある大物でなければならなかった。

亡命共産主義者の摘発—ダレス機関の関与

ラーコシが何時の時点からライク肅正を考えついたのか分からない。いくつか理由は挙がられるが、それも憶測に留まる。

ソ連内務省、したがってスターリンの命を受けたラーコシは、まず戦中に西欧へ亡命した共産主義者で、戦後になってハンガリーに戻った者に狙いを定めた。当時の共産党はどこも三層の指導者、つまり「モスクワ亡命者」、「国内非合法闘争者」、「西欧亡命者」から構成されていた。ハンガリーのトロイカあるいは「4人組」は皆、「モスクワ帰り」である。彼らが標的になることない。しかし、政治局の残りのメンバーには西欧亡命者がおらず、ライクもカーダールも「国内残留組」だった。

当時、戦争前からスイスに居住し、ハンガリー軍の諜報部員として働いていたフェレンツ・エドモンドは、戦中・戦後の亡命ハンガリー人の動向を報告していた。その報告の一つに、スイスからハンガリーに戻り、党の中央委員として党本部に勤務するスーニィ・ティボールの名があった。

戦時中、ヨーロッパにおけるアメリカの外交・諜報の指揮者として、アレン・ウェルシュ・ダレスが駐在していた。ダレス家は華麗な一族で、アレンは国務長官を務めたジョン・フォスター・ダレスの実弟である。プリンストン大学を卒業して外交官となり、レーニンのアメリカ渡航ビザ拒否時の外交責任者として知られ、1944年にヒトラー暗殺にも関わった経歴がある。戦後設立されたCIAの第5代長官に就任したが、文民長官の就任は彼が初めてで、1953年から1961年までの長期にわたって長官職を努めた人物である。

終戦直前、ダレスは亡命共産主義者の支援活動にも加わり、スイスのベルンに拠点を置く米軍の諜報機関OSS（Office of Strategic Service）の責任者として活動していた。ハーヴァード大学を卒業して外交官になり、その後生まれ故郷のスイスに共産党員として戻ったノエル・H・フィールドも、同様の支援活動に加わっていた。

フェレンツ・エドモンドが、スーニィ・ティボール等スイス亡命組のハンガリー帰還の詳細をフィールドから聞き、これを報告していた。それによれば、「1945年1月6日、スーニィ・ティボール他4名は、ユーゴスラビア共産主義者から取得した偽の軍医証明書を使って、マルセイユ、ナポリ経由でベオグラードに入り、そこでユーゴスラビアの要請に応じて軍医証明書を廃棄し、セグドへ入った」という。マルセイユからナポリへはユーゴスラビアが手配したアメリカの軍用機を使ったとある。まさに、アメリカとユーゴスラビアの諜報機関の手助けで、ハンガリーに戻ったことになる。この古い事実が証拠とされ、党本部に勤務するスーニィー派は、「アメリカ帝国主義とユーゴスラビア修正主義のスパイ」と決めつけられることになった。

他方、この諜報活動を行っていたフェレンツ・エドモンドは、ライク裁判が行われている1949年9月、オーストリアのソ連占領地域からアメリカ占領地域に出向いた後、消息が分からなくなった。二重スパイであったと考えられる。ここからライク事件は「アメリカの挑発」によって惹き起こされたと考えることもできるが、二重スパイからライク事件へ繋げる論理は飛躍している。

ノエル・H・フィールド拉致事件

ラーコシはスーニィ摘発と同時に、これらスイス亡命共産主義者に手を貸していたフィールドに関心をもった。フィールドの人脈からさらに多くの亡命共産主義者の氏名が出るだろうからである。

ロンドンに生まれ、スイスで育ったフィールドは、生物学者の父の死後、アメリカに渡り、ハーヴァード大学を卒業して、外交官になった。その時に、亡命ドイツ人を介して、ソ連共産党員になり、共産主義となってヨーロッパに渡った。フィールドは中欧で亡命共産主義者の支援活動を行っていたが、戦後、アメリカで彼に対する訴追が準備されそうになり、新たな定住地を求めて、チェコスロバキアや東ドイツの諜報

部と関係を保っていた。1948年当時、東ドイツに移住すべく、定住申請への回答を待つ状態にあった。

フェレンツ・エドモンドの通報によって、ハンガリーのÁVHはフィールドがチェコスロバキア諜報部と関係が深いことを知り、フィールドをハンガリーに拉致する計画が立案された。

こうして、1948年から1949年にかけて、大がかりな国際的な奸計が仕組まれた。チェコスロバキア諜報部はフィールドの拉致・引き渡しをすぐには受諾しなかった。ソ連の許可がなければ承諾できないという態度をとった。ラーコシとピーテル・ガーボルはソ連内務省の中・東欧責任者ベルキンの了解をとり、チェコスロバキア諜報部に、フィールドをプラハに招聘するように依頼した。

ドイツの移住許可を待つフィールドは、チェコスロバキア諜報部の招聘に応じて、5月初めプラハに向かった。5月11日午後3時半、パレス・ホテルにチェコスロバキア諜報部員が出向き、彼を車で郊外に連れ出した。そして、そこに待ち受けていたスーチ率いるハンガリーの拉致実行部隊に引き渡したのである。スーチはクロロホルムをかがせ、その日のうちにフィールドをハンガリーに連行した。

フィールドはアンドラーシ通り60番地に拘置されたが、すぐにノルマファ近くのエトヴォシュ通りにあるÁVHの秘密の館に移送された。フィールド拉致は最重要機密であり、一部の幹部のみが関知した事柄だった。この館で始まった尋問には、ファルカシュ・ミハイ、カーダール・ヤーノシュが直に関わり、スーチ配下のパウエル・ミクローシュとセンディ・ジョルジュが取り調べおよび独語通訳を担当した。

この時、ファルカシュ・ヴラジミールは隣室で尋問の録音を担当しており、「スパイ容疑」を否定するフィールドに激しい拷問が加えられたことを告白している。拷問によって強制された告白は二転三転するが、フィールドは自らの筆で、中欧における共産主義者の知人名を記した。そして、スイスにおいて亡命ハンガリー共

産主義者とコンタクトがあったこと、スーニィと顔見知りであったことを認めた。

ラーコシにはこれで証拠十分だった。フィールドの記した氏名リストは即座にラーコシに届けられ、ラーコシはこれをチェコスロバキア、ポーランド他の近隣国の共産党幹部に送った。このリストはそれぞれの国で、その後の「アメリカのスパイ」摘発に利用された。

消えたアメリカ人

フィールド拉致は極秘のアクションだった。当初、フィールドの妻ヘルタは夫との連絡が途絶えたことを心配しておらず、東ドイツへ向かったものだと考えていた。しかし、しばらく時間が過ぎ、事故に遭ったのではないかと心配になり、チェコスロバキア諜報部に出向いた。諜報部員は国境付近にフィールド失踪の手がかりがあるとヘルタを車に乗せ、ハンガリー国境に向かい、そこでハンガリー諜報部隊に引き渡したのである。

ヘルタが消える前、フィールドの弟であるヘルマン・フィールドはヘルタの知らせにヨーロッパに渡り、ワルシャワでの所用を済ませてプラハに戻ると言ったまま、音信不通になった。ポーランドの諜報部に逮捕されたのだった。

さらに、フィールドの養女エリカ・ヴァラックはドイツの共産主義者の仲介を得て、ベルリンに向かい、両親の消息を探ろうとしたが、ソ連占領地に入ったまま消息不明になった。

かくして、フィールド一家はそれぞれがハンガリー、ポーランド、ソ連の諜報部隊に拘束され、消えてしまったのである。

フィールド拉致はライク裁判においても極秘事項だった。そして、もしその後に起きた亡命事件が発生しなければ、フィールド拉致事件は永遠に知られることなく、闇に包まれたままに歴史の中から消えるはずであった。

フィールド釈放事情

フィールド逮捕からすでに5年半が過ぎた1954年秋、ラーコシは治療目的でソ連に滞在してい

た。そこへポーランド統一労働者党第一書記ビェルトが突然やってきた。緊急の用件でモスクワに出向いてきたのだ。

ポーランド諜報部幹部ヨーゼフ・スィヴィアトウオが、前年暮れのベルリン出張時に亡命し、ヘルマン・フィールド拘束の事実が公になり、アメリカから外交ルートを通して、引き渡し要求が来ているというのだ。それで、慌ててモスクワに飛んで来た。ヘルマン・フィールドを釈放し、名誉回復しないとまずいという。ラーコシは暫く時間が欲しいと答えたが、その日のうちにノエル・H・フィールドの釈放指示を出した。

フィールドは1954年11月17日に自由の身になった。釈放されたフィールドは定住地がないこと、共産主義者としてアメリカに渡る訳にはいかないことを理由に、ハンガリーへの亡命申請を行い、1970年に亡くなるまでハンガリーに留まった。東独で消えた養女のエリカ・ヴァラックはベルリンからソ連へ移送され、スパイとして死刑判決を受けた後に15年の懲役に減刑され、シベリアの労働キャンプにいた。フィールド一家の釈放に合わせて、1955年に釈放された。

フィールド尋問からライク逮捕へ

さて、フィールド尋問によって、ラーコシの奸計は最後の段階を迎えた。フィールドの供述にもとづき、中央委員の重責を担い、共産党本部に勤務していたスーニィ・ティボールとその部下サーライ・アンドラーシュが、5月18日に逮捕された。実際には、フィールドの供述以前から、ユーゴスラビア共産党の支援を受けた亡命者たちの逮捕は計画されていた。時間的な順序だけが問題だったのだ。

スーニィとサーライの尋問にも拷問が加えられ、5月23日、スーニィの口からライクにかかわる一つの事実が語られた。ライク肅正の口実を得たラーコシは、バラトンリガの別荘に4人組に加えカーダールを呼び、ライク逮捕の意思を伝え、拘束手順について意見を求めた。

(関連記事は、<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい)